
蛭ヶ屋敷の馬幽霊

白馬 黎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛍ヶ屋敷の馬幽霊

【コード】

N9691Q

【作者名】

白馬 黎

【あらすじ】

主君・夏山重正の死をその妻子に伝えるべく蛍ヶ屋敷へ向かう飛脚の五郎丸は、一夜の宿を求めた川原の小屋で蛍の大群、そしてその中にたたずむ馬の幽霊に出会った。

夏らしい蛍と幽霊の和風幻想譚。原稿用紙換算64枚、完結済み。

(重複投稿：本家サイト「Empty Air」)

一、馬幽霊

せせらぎの音に五郎丸はほっとした。狩人に教えてもらった抜け道だったのだが、いかにも獣道といたいでたちで、道を見失わないための木肌の傷のほかには人の手の入った様子はまったくなし。おまけに目印の川がいつまでたっても出てこないのが不安だったのだ。五郎丸は青星の背を降り、青星に水を飲ませた。自らも小川に直接口をつけて水を飲み、すっかり乾ききってしまった手ぬぐいに水を吸わせて首に巻く。

（あとは、この川をくだっていけば、螢ヶ屋敷に着くはずだな）

水が鼻にでも入ったのか、勢いよく鼻を鳴らした青星の首を軽く叩き、五郎丸は下流を見やった。

彼がこの、飛脚という身分にふさわしくない駿馬をたまわってから三月が経つ。桜の季節から、流水が恋しくなる季節にうつろうほどの時が。

*

「みな、よくぞ今まで、わしに仕えてくれた」

じつとうつむき、唇を噛んですすり泣きをこらえる臣下らの中に、五郎丸もいた。農民出の飛脚という身分でありながら、いったい何が気に入られたのか將軍、夏山重正なつやまのしげまさに重用され、専属の飛脚として遇されていたのだ。

それでもこんな場、重正の重臣たちの中、同じ畳の上に座っていられるような身分ではないのだが、居心地の悪さより悲しみと無念さがはるかに勝って、きれいにまげを結った重臣たちの顔などまったく目に入っていない。それはどうやら家臣らも同じのようで、みすばらしい姿の飛脚など、誰一人目に留めていないようだ。

「今日集まってもらったのはほかでもない。……わしの死後のこと

を頼むためだ」

重正は三月前の戦で、初陣の殿を守りきれず死なせてしまった。切腹を迫られた重正は、殿を死なせ、まして名誉を挽回する機会もないならば、甘んじてその命を受けようと決意を固めてしまったのだ。重正自身もその戦のさなかに愛馬を失い、利き腕に重傷をおっていた。

「これから名を読み上げていく。呼ばれた者はわしの前にきなさい。忠正」

しきりに目をしばたかせながら、壮年の男が前に進み出る。

「今までよう仕えてくれたな。そなたはわし一番の部下じゃ。弟のように、また息子のように思っておる……そなたの度量を信じ財産分配を任せるぞ。これに書いてあるよう頼む」

重正は彼にほほえみかけ、一本の巻物を手渡した。わざわざ用意された台におかず、手渡したのだ。男は深々と頭を下げ、それを押しいただいた。下を向いた拍子に涙がその頬を伝っていった。

「道孝」

名を呼ばれた臣下がまた、深くうつむきながら立ちあがった。

重正はひとりひとり家臣を目の前へ呼び寄せ、重正亡き後の、家臣たちや使用人たちの次の行き先を書いた巻物を担当のものに手渡し、ひとりひとりにねぎらいと感謝の言葉をかけた。

「五郎丸」

五郎丸は重々しく立ち上がり、重正の前にひざまずいた。

「今まで、そなたもよく仕えてくれたな。そなたに、わしから最後の仕事じゃ」

重正が手に取ったのは、乗用鞭と小さな巻物。

「これと、あおほしのくろこま青星黒駒をそなたにたくす。この手紙と、鞭を遺品として、蛭ヶ屋敷の妻子に届けてくれ。最後に妻子の顔を見たかったが、こればかりはどうしようもないな。申し訳なく思っている、あの世で待っていると伝えてくれぬか」

五郎丸は黙って頭を下げた。青星といえ、重正がこの戦で失っ

た駿馬、青風の息子だ。青風が戦死した以上、重正の次の乗馬は青星が妥当。だが、それは重正が生きていてこそその話だ。五郎丸はうつむいたまま、ぐつと唇を噛み締めた。

「五郎丸、そなたの快足はほんに、見ていて気持ちがよかった。長く仕えてくれた褒美じゃ。この仕事が終われば、青星をそなたのものにしてよろしい。この手紙を厩奉行に見せるように。盗まれたと思われては申し訳ないからな」

五郎丸はぎよつと顔をあげた。返事の一言も喉に引っかかって出てこなかった。まさかこの名馬を一介の飛脚がたまわる？ こんな場で戯れということもあるまい。名馬の子は当然名馬、五郎丸には分不相応もいいところだ。

五郎丸の顔つきを見たのだろう。重正はひよいといたずらっぽく眉をあげてみせた。

「遠慮するでない。それとも、おのが足をたのみに生きる飛脚に、乗馬は不要か？」

めっそももない、とあわてて答えようとしたがこれも声にならず、結局、激しくかぶりを振ったのみ。駅馬を使う飛脚もいるし、五郎丸自身も馬には乗れるのだが……。

「殿」

やっと五郎丸の周りから諫める声があがったが、重正の答えは簡潔だった。

「これがわしの望みだ」

呆然としている五郎丸の顔をのぞきこみ、重正はからから寂しげな笑い声をあげた。持て余すようなら青星は蛭ヶ屋敷へ置いてこればいい、ただ蛭ヶ屋敷には青星で向かってほしいと重正は告げ、どうしてもどうしても喉から言葉が出てこない五郎丸の手の上に、鞭と、巻物と、厩奉行にあてた手紙を置いた。

それが、五郎丸が最後に見た主君の姿だった。

溪流の岩の上で一息ついていた五郎丸は、遠雷のとどろきにあわてて空を仰いだ。うっそうと木々の茂る山の中にいたせいで天気の問題に気づかなかつたのだ。夕立がくる。ふところの巻物や乗用鞭がちやんと油紙に包まれているのを確かめたところで、ぽつ、と雨粒が落ちてきた。

「これは、よわったな」

五郎丸はあわてて蓑笠をかぶり、青星の腹帯をしめなおしてその背にまたがった。

足場の悪いこの道でまさか馬を駆けさせるわけにいかない。ぬかるみに、濡れた苔に。鞍下で青星がときどき足を滑らすのを見て取って、五郎丸は青星の背を降りた。鞍を濡らさないよう手ぬぐいと油紙を敷き、手綱をとって歩き出す。

真つ黒な雲が天を覆いつくしていた。降り始めた雨は一瞬ごとに激しさを増してゆく。雨ばかりか風まで強くなってきて、まるで霧の中を歩くように視界が悪かった。通り雨だとは思うが、蓑傘をかぶった五郎丸でさえ息苦しい。ましてや雨よけを何も身に着けていない青星は。

（青星。本当に飛脚の馬なんざになりさがっていいのか？ 雨の中、濡れそぼりながら野宿するような、こんな生活でも、いいのか？）
自嘲しつつ振り返ると、睫毛にいつぱい水滴をつけた青星の顔があった。申し訳なかったが、こんな山の中に、螢ヶ屋敷をのぞいて雨風をしのげる場所があるはずもない。

あるはずもないのだが。

前方に獵師の出小屋らしいものがあるのに気づき、五郎丸は目を見張った。きつとこの道を教えてくれた獵師のものだろう。

「青星、助かったぞ！ 軒先を貸してもらおう。雨宿りできるぞ」
五郎丸の声にこたえ、青星も急にいきいきと歩みを速めだした。

が、近づいてみて五郎丸は首をかしげた。獵師の出小屋にしてはいやに立派なのだ。あの老獵師は馬を飼っていたらうか。小さいな

がら馬房まである出小屋など、初めて見た。なにはともあれ天の助けには違いない。五郎丸は青星とともに馬房へ転げこんだ。

青星の背から鞍をおろし、手ぬぐいでごしごし顔をぬぐってやると、青星もほっとした様子でふうっと大きく息をつく。

「やれやれ、災難だったなあ」

荷物を小屋の中へ入れさせてもらい、手ぬぐいをしぼりしぼり青星の体をふいていった。

旅の間に青星の体はいくらか痩せたようだ。本来、「青星さま」と呼ばなければならぬ身分の馬のぬくもりを感じながら、五郎丸は唇を噛んだ。

（濡れそぼらせて、ひもじい思いをさせて……）

やや小降りになってきた雨の中を出て行って、草を刈って持つてくる。大豆や米をまげてやればいいのだが、穀物はいかんせん運ぶには重い。近所の農家から買えるときは買って食ませていたのだが、そうでないときは今のようにならぬだけの飼料だった。

（やはり青星は、蛭ヶ屋敷へ置いていこう。わたしには荷が重い。屋敷で夏山さまの娘御の乗馬にしていただこう）

主君の死をその奥方や娘御に伝えることを思うと気が滅入ったが、これが五郎丸の仕事だ。重正からの、最後の仕事。それも、明日で終わる。

五郎丸は青星の首を軽く叩いた。

「明日までの辛抱だ。蛭ヶ屋敷に着けば、いいものが食べられるからな」

青星は草を食みながら軽く鼻を鳴らしたただだった。

青星に食ませる草を刈ったり水を汲んだりしているうちに雨はやみ、西の方にばかりと夕日が出た。雨はあがったとはいえ、ぬかるむ地面の上での野宿はつらい。小屋に心から感謝しながら五郎丸は

小屋の中へ入った。

小屋の中に入り、五郎丸は目をむいた。土間があり、一段高くなつた屋内には畳がきつちりと敷き詰めてある。中央に炉がきつてあり、奥には文机と、そこに山と積まれた書物。教養のない獵師の小屋に書物などあるわけがない。五郎丸は戸惑いながら、おずおずと蓑笠をぬいだ。俳人が歌人の小屋だろうか。きつとそうだ。ここは溪流沿い、この時期なら蛍がよく見られるはずだった。

入っていいものかしばらく五郎丸は土間でうろろしていたが、ひとまず汚さなければ大丈夫だろう、と汲んできた水でよく足をすすいで畳にあがった。囲炉裏で火を起こし、汚れたついでに洗濯をした衣を乾かす。重正の手紙と鞭も油紙の包みから出し、汚れていないか、墨が流れていないかを確認して、念のため一緒に乾かした。水汲みついでに捕ってきた魚も、煙のにおいがついたらどうしようと思つと炙るに炙れないので、結局、表でさばいて生のまま食べた。魚はそれでよかつたのだが、次は立派な小屋すぎて眠るに眠れない。

(青星と一緒に馬房で寝ようか)

五郎丸は苦笑して囲炉裏の火に灰をかけ、重正の手紙と鞭をふところに小屋を出た。

「おお、これは見事だ」

外は昼のようには言わないが、夜明けのように明るかつた。川で無数の蛍が舞い踊っているのだ。近くへ飛んできた一匹を反射的に両手で包みこみ、五郎丸はふつと笑つた。

ふいに青星に蛍を見せたくなくて、五郎丸は蛍を両手の間に捕らえながら馬房へ向かつた。四肢を折って休んでいた青星が五郎丸の姿をみとめて起きあがる。静かに休ませてやるべきだった、と少し後悔しながらも、五郎丸は青星の鼻先に手を持っていき、そつと右手と左手を離れた。青星がぴくりと耳をそばだて、一方後ろへさがる。蛍の動きを見守る視線と耳の動きがおかしくて、五郎丸はもう一匹蛍を捕らえてくると、また青星の目の前で放した。

「蛭が好きか、青星？」

じつと蛭の行方を見守る青星に語りかけると、青星は答えるように耳をぴくぴく動かし、馬房から首を伸ばして川を見やる。五郎丸も柵にもたれ、青星と並んで川を眺めた。

（この馬とこうしていられるのも、今夜で最後か）

明日には蛭ヶ屋敷に着くだろう。そこで飛脚としての役目を果たして、五郎丸は屋敷を出る。屋敷を出てしまえばこの馬にはおそろく二度と会うまい。蛭ヶ屋敷へ行ってくれ、と五郎丸に頼む主君はもういないのだから。

蛭を見ながら感傷にひたる五郎丸を押しつけ、青星がぐつと首を伸ばした。一方向に耳をむけ、何だろう、とばかりに何かを見つめている。

「どうしたんだ？」

青星はかすかに、不安げに鼻を鳴らした。何かを見つけたらしい。五郎丸は五感を研ぎ澄ませて青星の見ているほうを眺めた。

かすかに、何かか聞こえた。青星の耳がぴくつと動く。

もう一度。

「馬の、いななき？」

青星が別の方向を見て耳をそばだてる。青星の見つめるほうを見て、五郎丸は思わず声をあげそうになった。川沿いに行く平らな道がある。人の手でならされた道、そこを歩いてくる黒々とした人影。

こんな時間、こんな山奥に人がいるはずがない。この小屋の持ち主ならいてもおかしくないが、この丑三つ時に山奥をそうそう出入りするはずがないだろう。とすると、幽鬼か、人食い鬼か。

五郎丸は体をこわばらせ、青星の鞍を手にとった。荷物も、護身のヒ首も小屋の中。取りに行きたいが、青星から離れるのは不安だ。とすれば、青星の俊足を頼りに逃げるのが一番だった。重正の手紙をふところに、遺品の鞭は長いので鞍袋に。鞍を背に乗せ、ハミを噛ませると、青星が不安げに鼻を鳴らした。

「……………あ……………み……………さま」

人影が呼ばわった。老爺の声だ。距離と川音のせいでよく聞こえないが、誰かの名前か。

青星が耳をそばだて、体をこわばらせる。遠い、馬のいななき。腹帯を締めていた五郎丸は川のほうを見、目を見張った。

蛭が、今の今まで好き勝手に戯れていた蛭がすうつと集まり始めたのだ。まるで蛭合戦、蛭が二手に分かれて合戦のようにぶつかりあうように始めは見えたが、すぐに違うとわかった。ひとところに集まって、蛭の上に蛭が重なり、光の玉になってゆく。

「……あ……すみ……さま」

光の玉はむくむく大きくなった。こぶしほどの大きさが、みるみる子犬ほどになり、豚ほどになり、人ほどになり、さらにはそれを通り越して、ぼうつと光る四本足の獣に姿を変えていく。

一度玉を作った蛭が、ふいに、さあつと離れた。蛭は離れても形は残っている。淡く向こう側の景色の透ける体、それが蛭をまとして立っていた。

「馬、か？」

それが口を開くと、今までかすかに聞こえていたいななきが、今度ははつきりと聞こえた。五郎丸は悪寒をこらえながら青星に身を寄せた。

馬の幽霊だ。四肢が透け、向こう側が淡く透けているのに黒馬とわかる。青星と同じ、黒い馬。

川岸の老爺が差し招くように手を伸ばす。反対側の岸边にいた幽霊馬がすうつと水面に一步を踏み出した。蛭をまとい、ゆつくりと川面を歩いてくる。

不安と緊張に耐えかねたか、五郎丸の隣で青星が鼻を鳴らした。

とたん、幽霊馬が川面で顔をあげ、五郎丸と青星を見つめた

馬は馬の発する音に敏感なものだ。幽霊馬と五郎丸の視線が交差する。不思議そうに五郎丸と青星を見つめた幽霊馬が、一瞬の後、耳をぎゅつと後ろに伏せた。尾をぴしゃりと振る。怒気に打たれ、青星が怯えて耳を伏せた。

身の危険を感じて五郎丸が青星の背にまたがると、幽霊馬が水面を蹴るのが同時。五郎丸があわてて脚を入れるのと、幽霊馬が川を渡り終えるのが同時だ。鞍袋にはさみこんであった重正の乗用鞭が落ちると、幽霊馬が小屋の入り口のあたりに到達するのがこれまたほぼ同時。

「鞭が！」

叫んだものの取りに戻る余裕はない。耳を伏せ歯をむきだし、さまざまい怒りの形相を浮かべた幽霊馬の蹄音が青星の背後に迫っていた。

川辺にいた老爺を突き飛ばさんばかりの勢いで駆け抜ける。すれ違う瞬間、老爺と目があった。粗末な衣を着た、おそらくは生身の人間であろう爺さんが目をいっばいに見開いて鞍上の五郎丸を見つめている。なんとなく顔に見覚えのある気がしたのだが……事情を問いただしたいがそれどころではない。

「くそつ、なんなんだこいつは！」

毒づきながら五郎丸は蛍にいろどられた幽霊馬を一瞬かえりみた。ぼやけてはいるが長く力強い四肢、引き締まった体躯。この幽霊馬も、生前は名馬だったに違いない。でなければ怯えて全力疾走する青星、この駿馬に追いつけるものか！

二、老爺

五郎丸と青星は駆けに駆けた。あの小屋から先には小屋の持ち主が作ったのであろう馬の通れるちゃんとした道があり、走りやすかったことは走りやすかったのだが、それは馬幽霊にとっても同じことだ。溪流ぞいの道を離れて山へ入っても、木立の間に隠れても幽霊馬は追ってくる。隠れるにしても息も絶え絶えな有様では、息の根を聞きつけるのもたやすかったのだらう。迷う様子も見せずに襲ってきた。

(なぜ、こんなに逃げてても……)

痛むわき腹を押さえ、なおも駆けるのをやめられない。何刻逃げても、それでも幽霊馬は追ってくるのだ。必死の形相で襲ってくる空がつつすら白みはじめ、夜明けの近いことを告げていても。

(くそつ、なんでまた、現れるところを見ただけでこんな必死に襲ってくるんだ！)

鞍下で青星の足がもつれるのを感じながら足を止められない。いくら名馬の体力とはいえど、ここまで駆け続けては青星も限界だ。

ふいに、前方が開けた。黒い瓦のふかれた白垣、見覚えのある門構えがある。蛸ヶ屋敷だ！ 屋敷の前に躍り出た瞬間、門の内側で雄鶏が時を告げた。夜が明ける。

とたん、ずっと五郎丸と青星を追い続けていた蹄音が失せた。おずおず振り返ると、馬幽霊のまどついていた蛸が四散し、溪流へ帰っていくところだ。馬幽霊の姿は消えていた。

「逃げ切った、か……」

五郎丸はそろそろと鞍を降り、思わずその場にへたり込んだ。汗で全身の毛の色の変わった青星が、口からぼとぼと泡を垂らしながら五郎丸に鼻先を寄せてくる。鼻の穴をめいっばい開いてふうふういっている青星のひたいをなでた。

「何だったんだ、いったい。災難だったな、青星」

疲れか恐怖か震える足を叱咤して立ちあがり、青星の馬具をはずすと、青星はいそいそと川のほうへ向かっていった。五郎丸も川へ降り、青星とならんで水を飲む。あれだけいた蜚の姿はもうどこにもなかった。

青星はひとしきり水を飲んだ後、汗まみれの体が気持ち悪かったのか早朝の冷水の中へザブザブ入ってゆく。それを見て五郎丸はあわてた。冷たい水の中へ自ら入っていくということは、もしや足が痛いではなからうか。

衣を脱ぎ捨て青星のそばへ行き、足に腫れがないかを確かめた。蹄はすりへり、足首も熱を持っているが、腫れはない。あの夜の道でねじりもひねりもしていないとは、さすがは勘のいい名馬だった。「お前じゃなけりや、逃げ切れんところだった。ありがとうな。本当にいい馬だ、お前は」

青星は溪流にひたり、気持ちよさそうに目を細めている。背中から水をかけてやると、汗で真っ白ににごった水が青星の体を伝っていった。

青星を洗い終え、五郎丸はすっかり冷えた体で岸にあがった。青星も水からあがり、ぶるぶる体を震わせて水気を飛ばすと、運動の後は飯だとばかりそこらの草を食み始める。気の向くままに草を食みながらうろつる動き回る青星の体を手ぬぐいでふき、足の熱が冷えているのを確かめて引き綱をつけた。

引き綱の端をにぎりしめ、五郎丸はごろりと草の上で横になる。こんな早朝におとないを入れるのは申し訳なかった。

（申し訳ないといえは……本当に青星にも申し訳なかった。今日で別れだというのに、あんな無茶な駆け方をさせて。やんごとなき馬にさせることではなかったな。すまん、青星。どうか恨みに思わんでくれ）

五郎丸は寝息をたてはじめた。

*

「五郎丸、五郎丸じゃない！」

頬を軽く叩かれ、五郎丸は目を覚ました。寝ぼけてかすむ目をしばたかせる。覚えのある顔に五郎丸は飛び起きた。

「お、お雪か？ 久しぶりだなあ！」

「あなたなんでこんなところで寝てるの、門叩けばいいのにさ。行き倒れかと思っちまったよ。にしても、ほんと久しぶりねえ！」

五郎丸につながれ、足元の草を全部食べつくしてしまった青星が鼻先でお雪をつついた。お雪はおかしそうに笑いながらも、おっかなびつくり桶をかざして青星の鼻を遠ざける。

お雪はここの下働きをしている娘だった。五郎丸が仕事でここへくるたび布団や料理の世話をしてくれるので、すっかり顔なじみなのだ。水を汲みに来たのだろう。

「あなた、お馬さまをもらえる身分になったのね。いつか出世すると思ってたんだあ、あなたは」

違う、俺の馬じゃなくて奥方へのお届けものなんだ、と答えようとして五郎丸は青ざめた。あわててふところをさぐる。重正の巻物はちゃんと入っているが、鞭がない。五郎丸の荷物も何一つない。全部、あの不気味な小屋に置いてきてしまったのだ。

「どうしたのよ、血相変えて。もしかしてお届け物、落つこととしてきたとか？」

「その通りだ！ お雪、お前この川沿いの小屋、知ってるか？ 上流の。小屋からここまでちゃんと道が整備されてたつてことは、蛸ヶ屋敷の人が管理してるんだろう。あそこに置いてきちまった」

「うそ！ あの幽霊小屋に泊まったのあなた？ しかもよりによって蛸の時期に？ なにか出なかつたでしょうね？」

「出たよ、馬の幽霊がな。そいつに夜じゅう追っかけられて、ここまで必死に逃げてきたんだ。まったく、散々だよ……でももう一度行かなきゃならんな。くそっ、鞭さえ落としてなければ、俺の荷物なんざどうでもいいんだがなあ」

お雪は真つ青な顔で固まっている。五郎丸はいらいらと立ち上がった。

「お雪、とりあえず飛脚の五郎丸が夏山さまの書簡を携えて参つたと、そう奥方さまに取り次いでくれんか。鞭は後回しだ。つて、おい、お雪！」

「青霞さま、青霞さまの幽霊が出たですつて！ きゃあー！」

悲鳴を上げて持っていた桶を放り出し、門へ駆けてゆくお雪を五郎丸は啞然と見送った。

「おい、お雪つたら！」

突然の大声に目を白黒させている青星と顔を見合わせ、五郎丸は首をかしげた。

「水汲みはどうするんだよ。それに青霞さまつて。まさか青星のことじゃあるまいし、誰のことだ」

ぶるり、と青星が鼻を鳴らす。

(そつえば)

青霞、青霞、と口の中で繰り返し、五郎丸は顔をしかめた。

……あ……すみ……さま

昨夜、あの老爺の声、あれは「青霞さま」を呼ばわる声ではなかったか。悪寒を振り払い、五郎丸はお雪の残していった桶を取りあげた。

片手に青星の手綱を、片手に水の入った桶を持って門をくぐると、屋敷の中からどたばた騒々しい足音が聞こえてきた。おそらくはお雪が悲鳴まじりに下働き仲間を起こしているのだろう。

「まったく、騒々しい娘だ。なあ、青星」

五郎丸はその幽霊に出くわし、実際たいへんな思いをした当人なのだが、これだけ騒がれてしまうと「別にたいしたことなかったぞ」と言いたくなってくる。まあ、この騒々しさがあの娘のいいところではあるのだが、欠点であることも否めそうにない。

「出迎えもこの様子では来てくれそうにないか。行こう、青星。これからの住処へ案内しなくちゃな」

桶を門のところ置き、五郎丸はぶらぶら厩へ向かつて歩き出した。

「あ、だめだめ！ 五郎丸は厩へ行かないで！」

とたんにぽーんとお雪が屋敷の中から飛び出してきて五郎丸の行方をさえぎった。青星がびつくりして目を白黒させている。

「おい、どうしたんだよ。そんな走つてこつちに来たら、驚いた馬に蹴飛ばされるのがおちだ。青星は聡いからそうならなかっただけでな、気をつけるよ」

「わかった、わかったわよ！ でも行つちゃだめよ、厩には。ちょっと待つてて、誰か連れてくるからね。厩に行かないですよ！」

どたばたと騒々しく屋敷の中へ走りこんでいくお雪を、五郎丸はまたも引き止められずに見送った。

「なんなんだ、まったく」

仕方なく縁側に座つてぼんぼん青星の肩をたたくと、名馬は不思議そうに耳を動かした。

「どうやら妙な別れ方になりそうだな」

青星はわかつていのかいないのか。ただ不思議そうに、濡れた真つ黒な目を五郎丸に向けている。

「ここでこんな別れか……なんだか情けないな。また帰る前に一度、ちゃんと厩に寄るよ。そのときにちゃんと別れをしような」

やがて飽きたのか首を下げて草を探し始めた青星を五郎丸は引き綱をひっぱって引き戻した。これからはこんな雑草ではなく、毎日大豆や米の入った、ちゃんとした飼料を食ませてもらえるのだ。黒砂糖もなめさせてもらえるかもしれないぞ、と青星に語りかけ、自分の口に唾がわくのを感じて苦笑した。

「早く、早く来なさいよっ！」

「そんなせかさんでくれ、こんな朝っぱらから」

あわただしいお雪の声と、強引に連れてこられたらしい眠たげな男の声が聞こえてくる。厩番だろうか、そう考えて五郎丸は首をかしげた。

(そういえば、厩番の顔を誰も知らないな)

厩の位置こそ知っているものの、人となるとてんでわからない。今まで蛸ヶ屋敷へは手紙を届けに徒歩で来たことしかなかったのだ。おかげさまで馬の通れる道を探して迷い、獵師に教えてもらった道、川の上流から回りこんできて酷い目にあつたのだが。

お雪にせつかれ、のっそりと現れたのは恰幅のいい門番だった。

「おわ、五郎丸じゃねえか！ 元気だったか、おい。相変わらず男のくせしてこんな細っこい体しやがってなあ、ちゃんと飯食ってんのか、飯！」

見知つた顔にひとしきり再会を喜び、五郎丸は青星の手綱を彼に預けた。青星は不満げに鼻を鳴らしたが、門番が手綱を引くと、聞き分けよく後に従つて歩いていく。ぼん、と五郎丸は通り過ぎていく青星の尻を軽く叩いた。

「さて、お雪。説明してもらおうか」

お雪がびくつと肩を震わせる。

「わ、わたし、朝仕事があるから」

「なんで俺が厩に行つちやいかんだ。青霞さまって誰のことだ？ それに久方ぶりにあつた女の子に出会つてそうそう悲鳴あげられて、気分のいいはずがなかるう。ちゃんと説明してくれよ」

腕をとつて縁側、五郎丸の隣に座らせると、お雪はしゅんとうなだれた。

「青霞さまのこと、知らないの？」

「知らんな、誰だ、それは」

「夏山さまの御馬さまよ。青霞黒駒さま……聞いたこと、ない？」

「夏山さまの御馬さまは、青霞じゃなく青風さまじゃなかったか？」

「青風さまのお父君が青霞さまよ！ 親子二代でお仕えされたの。青霞さまが戦で討ち死になされてからの御乗馬が青風さま。それまでは避暑に来られるときも蛸狩りへ行かれるときも、ずーっと青霞さまとご一緒だったんだからねっ！ 本当に知らないの？」

ちよ、ちよっと待て、と五郎丸はお雪をさえぎった。

「となると、まさかあの幽霊馬は青星の祖父になるってことか！」
「え、なになに、どうしたの？」

「今の馬は、青風さまの息子、青星黒駒なんだ。夏山さまに頼まれ
てな、ここへ連れてきたんだよ」

五郎丸は青星をたまわる経緯をかいつまんでお雪に語った。青風
が討ち死にしたことを話すとお雪は真つ青になり、続いて重正まで
もが自害したことを話すとお雪は今にも卒倒しそうな顔色になっ
てしまった。

「そんな……そんなことを知ってしまったら、奥方さま、お倒れに
なってしまうわね。五郎丸、嘘でしょ？」

五郎丸はただ首を振っただけだ。顔色が悪くなったどころかわん
わん泣き出してしまったお雪の背を叩きつつ、五郎丸は青星の連れ
ていかれた厩の方を見やった。

あの幽霊馬が青星の祖父にあたるなら、なぜ幽霊馬は夜通しで、
あんな必死に追ってきたのか。ひとまずあの俊足には説明がついた
が……青星の俊足は父譲り、ひいては祖父譲りなのだから道理とい
えば道理だ。お雪の怯え方の原因をはやく知ってしまいたかったが、
この様子では続きを聞きだせそうにない。

「お雪、落ち着いたら奥方さまにお話を伝えておいてくれな。そう
だな、朝餉に滋養のあるものをたくさん食べていただいて、その後
でこのお話を伝えるのがいい。厨房にも話をつけてくれ、な？」

お雪はしゃくりあげながら立ちあがった。感情を爆発させる分、
お雪は立ち直りが早いのだ。この性格が飛脚の五郎丸にはありがた
かった。嬉しい報せも悲しい報せも一番いいときに奥方さまへ伝え
てもらえる。嬉しい報せのときは聞いてすぐ奥方さまをたたき起こ
す勢いで伝えてもらえばいいし、悲しい報せのときは準備万端整え
た後、落ち着いてしまってから伝えてもらうのだ。今までずっとそ
うしてきた。けれど、これも最後だ。

「いつ、もの、客間に、いて。すぐ誰、か、人を、やる、から」
「ん、わかった」

厨房へ駆け出していくお雪の後姿に「おーい、水桶！」と呼びかける。お雪は文字通り飛び上がり、五郎丸が門のところに置いていた桶を見てほっとしたように息をついた。

水桶を持って小走りに厨房へ向かってゆくお雪を見送り、五郎丸はふところをさぐった。巻物を包んだ油紙のざらつとした感触が手に触れる。油紙に包まれた重正の遺書がそこにあることを確認し、五郎丸はため息をついた。

お雪が五郎丸の話を伝えたのだらう。厨房からすすり泣きが聞こえてきた。

お雪は五郎丸の言葉を忠実に守ってくれた。朝餉の後、衣類を調えるだけの時を置いて五郎丸は呼び出され、奥方に乞われるまま重正の最期を語った。

遺品の鞭のことは伏せた。ここにはないものを語ったところで仕方がない。あの不気味な小屋から取り返してきて、お雪にうまく返してもらおうのが一番だ。

奥方は気丈に五郎丸の話を聞き、やがて、「よう伝えてくれました」といつもより多い額の褒美をくださった。それを懐に後味の悪いまま退出すると、ふすまを閉めたところで、奥方の号泣が背中に突き刺さってきた。

ここでの用は済んだ。これ以上ここに居座って世話を頼むわけにはいかない。あとは鞭を取り返して引き返し、お雪をつかまえて後を頼むだけだ。それなら一刻も早く、日のあるうちに行つて引き返したほうがいい。あの小屋へ日が暮れてから行きたくはなかった。徒歩だといったいどれくらいかかるのだらうか。下手をすれば道中で野宿ということにはならないか。なにしろ今回は青星がないのだ。

(熊之助でもお供につけてもらおうか)

大男の門番の顔を思い出し、五郎丸は苦笑した。これではひとりで厠へ行けない子どもではないか。

(相手が人でないなら、いくらでも弱気を出せるんだがなあ)

青星の顔を頭に浮かべ、もうひとつため息をつく。あの災難を共に味わった青星ならわかってくれるだろうに。五郎丸は部屋へ向かっていた足を厩に向けた。一緒に行けずとも、せめて顔が見たい。

「そういえば、お雪のやつに止められてたんだっけか」

結局、五郎丸が厩へ行つてはいけない理由を聞きそびれている。

あれは一時的なものだったのか、それとも今もなのか。気にはなつたが、構うことはない。五郎丸はぶらぶら厩へ向かつていった。

青星は馬場で駄馬と一緒に放牧されていた。体つきが一頭だけやたらとたくましいので、一目で見分けがつく。荷運びの車のあとがついた馬たちと名馬と一緒にされているのは哀れだった。あまりにも場違いなのだ。

「青星」

呼ぶまでもなく青星は五郎丸に気づき、草をねだつて柵の間から顔を出している。青星は半日で早くも馬たちの長になってしまったらしく、ほかの馬が五郎丸に近づこうとすると耳を伏せて威嚇した。その覇気たるや、まさに名馬だ。

「だがな、動機が食い気では名馬の気が泣くぞ、青星」

五郎丸の声を聞きつけたのだろうか、視線を感じたので顔を上げると数人の厩番と目が合った。馬房の掃除でもしていたようだ。三人の厩番に軽く手を上げて応え、そのうち二人はすぐ興味を失ったようで黙々と作業に戻っていった。……が、ひとりはこちらを向いたまま硬直したように動かない。その顔を見て、五郎丸は思わず息を呑んだ。

「五郎丸、なんであんたここに！ 来ないでつて言つたじゃない！」

箒の柄が目の端に入ってきた。振り向かなくともわかる。お雪が五郎丸の斜め後ろに立っているのだ。

「お雪、なんで俺がここに来てはいけないのか、理由を聞いてもい

いか」

お雪が五郎丸の手を引いた。戻ろう、戻ろうと。

「お雪」

「……青霞さまに取り憑かれた厩番のおじいさんがいるの。五郎丸、青霞さまに追いかけられたんでしょ？ きつとあのじいさんに見つかつたら青霞さまが来て、五郎丸、殺されちゃうわ。青霞さまがじいさんに乗り移って、会つたとたん首をにぎられるかもしれない。怖いよ、私！ だから早く、早くお屋敷の中に戻って！」

口の端に苦笑が浮かぶのを感じた。そうだとしたらもう遅い、五郎丸だけでなく青星が見つかつた時点で同じことだ。

「ありがとう。だがな、聞いておいて悪いんだが、そういうのはご当人の目の前で言うことじゃないぞ」

お雪が目を見開き、小さく悲鳴をあげて五郎丸にしがみついた。

「ごめんなさい、ごめんなさいいっ！」

「謝らんでいいよ、お嬢さん」

昨夜河原で会つたあの老翁が一步一步、五郎丸とお雪に近づいてくる。なるほど、ここの厩番だから初めて会つた時「見覚えがある」と感じたのだ。厩に今まで出入りしたことはなかったが、この屋敷のどこかですれ違つたことくらいはあつたに違いない。

「若、お名前をうかがつてもよろしかろうか」

若、とは。まるで名のある武将の子息のようではないか。

「しがない飛脚の五郎丸だ」

答えてから、なるほどこんな名馬に乗っていたから良家の子息と思われたのか、と合点がいった。

「五郎丸殿。いつこちらを発たれるのですか」

「明朝に。青星は夏山重正さまの遺言によりこちらへ置いてゆくので、準備はいらぬ。ゆつくり休ませてやってくれ」

老翁が大きく目を見開いた。

「青星。それがこの御馬の名ですか」

「ええ」

しきりにお雪が五郎丸の袖を引いている。まだ何か言いたげな老爺の視線を無視して会釈し、青星のひたいをなで首を抱きしめてから五郎丸はその場を立ち去った。

門前の縁側のあたりへ来て、そこでやっとお雪がつめていた息を吐き出した。顔が真っ青だ。よほどあのじいさんが怖いらしい。

「それにしてもお前、思ったより怖がりだな。首、にぎられなかったぞ」

軽口をたたいたつもりだが、お雪は気に入らなかったようで顔をそむけてしまった。いつも大騒ぎしている彼女には似合わない仕事だ。

「すねるなよ。俺の心配をしてくれたのには感謝してるさ」

「五郎丸は何も知らないもの。だからそんなこと言えるんだわ」

縁側に座り込み、お雪は手で顔を覆った。細い肩をぶるぶる震わせて、泣いているのか怯えているのか。これは半端ではない。ただか噂ではここまでお雪の怯える理由にはならないはずだ。

「何かあったのか？ あのじいさん」

「私がここに奉公に来たころにね、ちょっと」

五郎丸が重正に仕え始めた時期と、お雪が奉公に来て初々しく働き始めたのがほぼ同時期。十何年も前のことだ。

「よかつたら話してくれないか。俺も、怖い」

お雪が顔をあげ、震えながらうなずいた。

私がまだここに来る前のことだったんだけどね。夏山さまは年少のころ、ここで育ちになられたんですって。そのころからおじいさんもここに勤めていて、御乗馬、青霞さまのお世話係をしていたそうなの。のちのち青風さまのご出産にも立ち会ったそうよ。

でもね、夏山さまがご成人なさって、上京されて。出世なさって、武将になられて、その何度目かの戦のとき、青霞さまが戦死なされたんですって。ちょうど蛍の時期で……。夏山さまがなつかしくて成仏できずに、夏山さまが必ず避暑に帰ってくるあの蛍見小屋で幽

霊になっているんですって。

夏山さまもおじいさんも、手を尽くして青霞さまが成仏できるようにおなぐさめになったそうよ。でも青霞さまは夏山さまなつかしさに成仏できなくて。避暑に帰ってくる夏山さまを心待ちに、毎年無数の蛍を従えて現れたみたい。

ところがね、夏山さまもお忙しいでしょう。年を経るに従い夏山さまもご出世あそばされて、とても避暑に帰ってこれる状況でなくなった年があったらしいの。当然青霞さまは悲しまれて、寂しさのあまり夜な夜なあのおじいさんを呼び寄せて小屋の掃除をさせたんですって。奥方さまもみんなも気味悪がって、あのおじいさんに暇を出したのよ。

その翌年、このときに私が奉公に来ただけだね、あのおじいさんもいない、夏山さまも避暑にこられない。激怒した青霞さまは悪霊と化して、屋敷に手当たりしだい雷をぶつけて火事を起こして、川へ逃げのびたみんなに人食い蛍をさしむけたのよ！ 火事の火を背景に、青い光を出す不気味な蛍が噛みついてくるの。いまだに夢に見て飛び起きるんだから！

奥方さまがあのおじいさんを雇いなおして祟りはおさまったんだけど、いまだに怖くて怖くてたまらないの。ときどき眠れない日なんかにあのおじいさんが蛍見小屋へ行くところを見かけることがあるんだけど、亡霊みたいで、本当に不気味なのよ。だって、眠りながらふらふら歩いてるんだもの。あれが昼に起きて、五郎丸を襲ったらと思うと本当に怖くって……。

五郎丸はつめていた息を吐き出した。

「ありがとうな。なるほどなあ、道理で。そんな青霞さまが、夏山さま死去の報せを持ってきた俺を許すはずがないよな」

お雪が泣きながらうんうんうなずいた。逃がすまいと、殺させまいとばかり、五郎丸の袖をぎゅっとにぎりしめて。

「じゃあ、鞭はどうするかな。俺が行ってお前に心配かけるわけに

もいかんし。そうだ、男衆で肝試しでもやらんか？ お雪、お前うまく扇動してくれよ。そうすれば俺は安泰、俺自ら行かなくとも鞭も持って帰ってこれるってもんさ」

「五郎丸……」

泣き笑いするお雪にほほえみかけ、五郎丸は空を仰いだ。

あの小屋へ行かないなら、本当に明朝ここを発つことになる。あのじいさんに言ったときは明朝小屋へ向かって出発し、引き返してきてお雪に鞭をたくすつもりでいたのだが。

別れを告げたかったが、告げられなくて 五郎丸はそのままお雪の横で空を仰いでいた。五郎丸も人の子だ、怖いものは怖かった。最後の仕事をしくじるのは悔しいが、命がかかっているのであれば逃げた方がいい。

(さよならだ、お雪、青星。達者でな)

そのまま何も起こらなければ五郎丸は翌朝早く屋敷を出て、そのまま二度と戻らなかつたはずだ。

そう、何も起こらなかつたなら。

三、青霞

「こんな時間にすまん。お雪を知らないか」

「あら、飛脚のお兄さんじゃない。どうしたの、そんなに慌てて」「いないんだな？」

「そうねえ、普段ならもう帰ってきて休んでるはずだけど。何してるのかしら。ねえねえ、ところでお雪ちゃんとの仲はどうなのよ、あなた。今日も仲良くお話してみたいけど？」

茶化すな、と短く切り捨て、五郎丸は礼も言わずに駆け出した。

青星に騎りて来たれ。

お雪はわたしと共に居る。

差出人の名も、どこに行けばいいのかも書いていない、異様なほど達筆な二行の短文が布団の中にねじ込まれていたのだ。うかつにも寝る前になってやっと気づいた。大慌てでお雪の安否を確かめたが、お雪はどこにもいない。部屋にも、厨房にも、掃除道具置き場にも、女中仲間の部屋にも……。

（あのじいさんがお雪をさらったんだ。青霞の指示で。俺を小屋へ呼び出すために）

選択肢はない。が、よりによって夜、あの小屋へ行く羽目になるうとは。

「青星！」

もう二度と会うまいと思っていた名馬が馬房の中で起きあがった。「青星、すまん。俺を乗せて駆けてくれるか」

青星がぶるつと鼻を鳴らした。馬は走る前に鼻を鳴らし、息の通りをすつきりさせる習性がある。やる気になってくれているのだ。それに励まされ、五郎丸は青星を引き出して馬装を整えた。

月は出ておらず、外は闇だった。そこに無数の蛍がおどっている。

花盛りの紫陽花の上、ホタルブクロの中、溪流の岩の上に。そのすべてが意思を持ったように川べりの道、道の両側をいろどるように舞っていた。

(蛍ヶ(ほたるが)標しるしだ……)

青霞が蛍を操っている。でなければ蛍がこれほど均整の取れた動きをするはずがない。

青星の馬脚が乱れた。青星も馬の子だ、恐ろしいはずだった。まさかとは思うが、小屋が近づいてきたら怯えて進まなくなるのではないか……。

(大丈夫だ、青星は生まれたときから軍馬として育てられているんだ。俺さえしつかりしていれば、青星は必ず進む。これしきのこと動じていたら軍馬はつとまらん)

青星の首を愛撫して心を静めると、馬脚の乱れはやんだ。

(なんだ、俺の怯えを読まれただけじゃないか)

馬は近くにいる人間の心を読む。心ノ臓の音や浮き出る汗、わずかなにおいでそれを感知できるというのだ。青星が笑うように鼻を鳴らした。

「心憎いやつめ」

カン、と強く脚を入れると、青星が応えて歩度を伸ばす。

「こうしてみると案外肝が据わるものだな、青星！」

あの小屋らしき明かりが見える。蛍の灯籠はそこへ五郎丸と青星を導いていた。あの小屋に、今、確実に人がいる。豪胆なところを見せた青星も、小屋が近づくにつれさすがに怖くなってきたようだ。五郎丸と青星とで互いに励ましあいながら駆け続けた。

蛍見小屋の周りにはひとときわたくさんの蛍が集まっている。逃げも隠れもしない、どちらにせよ青霞には五郎丸と青星がどこにいるかわかっているはずだと割り切っていたが、肝心の青霞の姿は蛍の群れのどこにも見当たらない。それがかえって不気味だった。

五郎丸は馬房の入り口にかがみ、そこに落ちていたものを拾いあげた。油紙にきっちり包まれた重正の乗用鞭。小屋の中で襲いか

かられたら、少なくとも入り口においてある荷物から匕首を取り出すまではこれで身を守るほかがない。だが、これは形見だ。万が一にも壊してしまつたら。

小屋の入り口のすぐそばに青星をつないだ。

「待つてくれ、すぐに戻る」

青星が不安げに鼻を鳴らして応えた。

大きく息を吸いこみ、一気に戸を開く。小屋の中にふたつの人影。

「五郎丸っ！」

いきなり飛びつかれ、五郎丸はもんどりうって後ろに倒れそうになつた。

「お雪！ 驚くだろう！」

お雪の涙顔が眼前に迫り、五郎丸はあわてた。心配するところで怒鳴つてしまふとは。弁解の意をこめてぎゅっと抱き返してやると、お雪の震えが伝わってきた。本当に怖かつたのだろう。

「俺が匕首でも持つてたらどうするんだ。お前を刺してたぞ」

「考えられるわけないでしょう、そんなの！」

お雪の肩越しにもう一人の人影をにらみつけると、人影は正座したままおろおろと視線をさまよさせた。この老爺と狭い小屋、しかもこの幽霊小屋で二人きりとは。お雪にはとんだ災難だ。

「どういうことだ。なぜこんな真似をした」

「違うのです！ わしがやったんじゃない。気がついたらここへ倒れておつたんです。青霞さまが、青霞さまが。申し訳ない……」

お雪がさつと青ざめ、五郎丸の袖をにぎりしめた。「眠りながら幽霊のように歩いている」状態で、青霞の命じるままお雪を連れてきたのだろう。

「俺の布団の中に手紙を入れたのは」

「そんなことが」

「馬に手紙は書けないはずだ。あなたがやったのか」

間違いなかつたと思つていたが、老爺は首を振つて否定した。

「わしは無教養で字は書けんすじや。でも、青霞さまは普通の御

馬ではない。わしの体を通して字をお書きになったことも一度、二度ではござらんです。あの文机を」

老爺の指す方を見て五郎丸は目を見張った。初めてここに来たときと同じく書物が積まれているのだが、あきらかに書物の順番が入れ替わっている。そのうえ一枚の和紙が机の上に広げられ、まだ乾ききらないてらてら光る文字が、あの異様なほどの達筆で書きつけられていたのだ。

それを手に取り、五郎丸は呆然と立ちつくした。

深草の 野辺の桜し 心あらば

今年ばかりは 墨染めに咲け

重正は生前、和歌を好んでおり、特に奥方への手紙には必ず一首書き添えていた。文を五郎丸に託すときにどの句がいいか尋ねられることもたびたびで、五郎丸がまったくの無教養とわかると、これはだれその歌だとか、読み方だとかを教えてくださいださったものだ。

重正が五郎丸に教えた有名な歌。そのひとつが上野峯雄の悲哀歌、まさしくこの歌だ。桜の時期に亡くなった重正へ、青霞が和歌を。

「五郎丸殿……いや、どうか若と呼ばせてください。どうぞ青霞さまをお恨み申し上げないでください。青霞さまはただ、お寂しいだけなのです」

ばしゃ、と何かが小屋の壁に当たる音で老爺の声が途切れた。ばしゃり、ぴしゃり。表から聞こえてくる音にお雪が怯えて身を固くする。

「心配するな、青星の尾だ」

蠅か、いやこの場所なら蛸でもたかっているのか、青星が尾を振り回しているのだ。それが小屋の戸に当たってぴしゃぴしゃ音をたてている。

ばしゃ、ばさっ、ばし、ぴしり。

「キーン！」

青星の悲鳴が聞こえた。さらに足を踏み鳴らす音、引き綱をちぎるうと柱を噛む音、腹立たしげに鼻を鳴らす音。青星が助けを求めている！

「青星！」

「やだ、行かないで五郎丸！」

お雪の制止を無視して戸を開く。とたんに無数の蛍が襲いかかってきた。黄色ではなく、青い光を出す蛍の群れ、そこに囚われて血みどろになった青星の姿が。

「きゃああ！」

お雪の悲鳴にあわてて戸を閉める。蛍が小屋の中へ入ってきたのだ。五郎丸は壁にかけた蓑を振り回し、小屋に入った蛍を叩き殺した。

「大丈夫か、お雪！」

「ほ、ほたる、ほたるうつ！」

「怪我はどれくらいだ、ちよつと見せる！」

お雪の手には蛇に咬まれたような傷ができていた。この蛍は蛇と同じく皮膚を食い破って流れる血をなめるらしい。こんなものだかられたら青星は。

「蓑を頭からかぶって伏せている、暑くても絶対に出てくるな。くそっ！」

「いや、行かないで！」

五郎丸の手をお雪がひつつかんだ。

「若とお嬢さんはここにいてくだされ、御馬はわたくしが。わたくしなら蛍に襲われませぬ」

老爺が部屋の奥で立ちあがっている。なるほど蛍が青霞の命で動いているならこの老爺は襲われまい。

五郎丸は自分の両手を目の前にかざした。部屋に入った蛍は十匹近く。五郎丸も咬まれていておかしくない数だ。なのに、老爺はともかくとして五郎丸も、ただの一箇所すら咬まれていない。

「わたくしめが出ましたらすぐに入った蛍を殺してくださいませ」

老爺が表へ飛び出した。一瞬で扉は閉まったが、その一瞬の間に数匹の青蚩が小屋へ入ってくる。が、蚩はすべてが五郎丸に近寄らず、お雪ばかりへ行こうとするのだ。あわてて手ぬぐいを振るい、蚩を叩き落した。

（あの爺さんが狙われない、俺も狙われない。なんでだ。青霞の狙いは俺だろう）

「青霞さま、どうぞお心を安らかに！ おやめください！」

老爺が声を張り上げているが、青星の悲鳴はやまない。青星にたかった蚩は尋常な数ではなかった。蚊柱の中に突っ込んだのかと思うほどの数がたかっていたのだ。

（待てよ……）

若と呼ばせてください

青霞さまはお寂しいだけなのです

（襲われているのは青星ばかりで、俺とじいさんは襲われない。お雪はとばかりを食っているだけとすると）

青星に騎りて来たれ

（まさか）

「お雪。俺が出たら、自分で蚩を殺せるか」

「いや。いや、だめよ、五郎丸！ 行かないで！」

五郎丸は重正の鞭をにぎりしめて表へ飛び出した。青星の目の前に青霞、体の透けた幽霊馬がいる。青い蚩を体中にたからせもだえ苦しむ青星と、淡く透けた幽霊馬の青霞。

重正なら、重正ならこんな時、どんな声を……。二十年近くも傍近くに仕えた五郎丸にはわかっていた。太く堂々とした、しかし鋭く威圧に満ちた將軍の声を。

「何をしておるのだ、青霞。やめぬか！」

怖気たように青霞が伏せていた耳を起こし、五郎丸に向ける。シューッ！ と鞭に空を切らせたその途端、全ての蚩が宙で動きを止めた。

「青霞。わたしと夏山さまを見まごうとは、それでもおぬしは忠臣

か。ましてや嫉妬にかられて青星を襲うとは言語道断。わかつておるな」

五郎丸は二頭の駿馬の間に立ちふさがり、堂々と胸を張って青霞と向かい合う。青霞がしょんぼりうなだれ、許しを乞うように口をもぐもぐ動かし始めた。凶星だったようだ。

「蛸を退けよ」

ぱっと、青星にたかっていた蛸が四散した。

「若……」

老爺が一步後ろへさがり、深く頭を下げる。「若」とは彼が若かりしころの重正に向けていた呼び名だったのだ。

老爺も青霞も五郎丸が重正でないことくらいわかつていたはずだ。重正はあの世にいる。老爺は屋敷で噂を聞いているだろうし、青霞も知っていたからこそあの和歌を詠んだ。だが、心から重正を慕うがゆえに、五郎丸と重正を、青星と青霞を重ねてしまったのだ。あの小屋の既で並んで蛸を眺める五郎丸と青星を。

「青星、青星。大丈夫か」

青星が悲しげに鼻面を寄せてきた。体が黒いために目立たないが、毛皮全体がぐつしよりと血に濡れている。皮膚を食いちぎられただけなので傷自体は浅いが、これは早く手当てをしてやらなくては。

青星を案じているうち、青霞が耳を伏せているのに気づき、五郎丸は苦笑した。

「怒るでない、青霞。この馬がどこの誰だと思っただ、お前の孫の青星だぞ。青風の息子だ」

青霞がびくんと耳をそばだてる。その顔つきで腑に落ちるものを感じ、五郎丸は目を伏せた。

「なるほど、夏山さまはお前に孫を見せてやりたかったのだな……。夏山さまは最後までお前を思っておったぞ」

青霞が目をしばたかせた。怨霊と化して老爺を操り、人食い蛸を操った幽霊馬とは到底思えぬ無邪気なしぐさで耳をそばだてると、ゆっくりと首を伸ばして鼻面を青星に近づける。青星がおずおず挨

拶にこたえ、祖父と孫はそつと互いの息のにおいをかぎあつた。

「青霞。夏山さまもお亡くなりにあそばせた。早く黄泉の国へ行つてお仕え申し上げよ。早く行かんと、もう一頭の忠臣に座を取られしてしまうぞ」

とたんに青霞が顔をあげ、耳を伏せて歯をむき出す。これだけ慕われれば重正も幸せだろう。五郎丸は思わず笑みを漏らした。

「何を怒っているのだ。お前の息子、青風にだよ。さあ、行け。青風はもう行つたぞ。夏山さまによろしく頼む。五郎丸は務めを果たしたと伝えてくれないか」

とたんに青霞の顔が不思議そうな、穏やかな表情に変わった。子を思う気持ちは馬も変わらないのか、重正が死後も評価してくれているのが嬉しかったのか。怨霊の顔から無邪気な馬の顔へ。そして、忠馬の顔へ。

「その蛸を、夏山さまにお見せせよ」

さあつ、と所在なさげにあたりを舞っていた青蛸の光が黄色に変わり、てんでんばらばらに散り始めた。

青霞は心を決めたようだ。前足を高く振り上げ、後ろ足で立ち上がる。そのまま宙へ一步を踏み出し、何も無い場所で蹄を力強く蹴り上げて。後ろ足が続き、尾が続き。透明なたてがみがさりとらなびく。首をしならせた青霞がこちらを振り返つた。振り返つた穏やかな瞳が急速に透明さを増していき……気がつくと、青霞の姿は消えていた。

遠く蛸ヶ屋敷から間の抜けた雄鶏の声が聞こえてくる。夜明けだ。「若、若。ありがとうございます……。いかん、年を取るとこれですじゃ」

ぼろぼろ涙をこぼす老爺の肩をたたき、五郎丸は笑つた。青星がげっそり疲れ果てた顔のため息をつき、悲しげに五郎丸の肩に鼻面を寄せてくる。その鼻も血にまみれていた。

「そんな若、若と呼ばんでください。わたしはただの、しがない飛脚の五郎丸です」

答えてから五郎丸は青ざめた。肝心の人を忘れていないか。

「しまった、お雪！」

あわてて小屋へ飛びこむと、小屋の中はめちやくちやに荒れていた。蛭に追われたお雪が暴れたらしい。例の和歌も踏みじられ、きつちり積まれていた書物は畳の上へ散らばり、囲炉裏の灰は蹴散らされ。そして当のお雪は小屋の隅で五郎丸の蓑をかぶり、座りこんだまま泣き寝入りしていた。

「悪かった、お雪」

「ばか……五郎丸のばか……」

寢言でののしっている。これはお雪が起きたら平謝りするしかないさそうだ。

「さてと、片づけを始めるか。ああ、その前に青星の手当てだ。まったくひどい目にあつた。この小屋も散々だしなあ」

老爺が笑って同意を示してくれた。

「では、わたくしは水を汲んできましようかね」

「ああ、よろしく頼みます。薬はありますか？」

「その戸棚、ああ、そう、その一番上の引き出しですじゃ」

軟膏と包帯を取り出し、桶を持って出て行く老爺を見送る。が、まもなく驚きの声が表であがつた。

「どうなされた？」

「若、いや、五郎丸殿！ 来てくだされ」

何事かとあわてて表へ飛び出した。

「これはこれは」

深草の 野辺の桜し 心あらば

今年ばかりは ……

明けつつある闇の中に浮かびあがる真つ黒な花、花。紫陽花もホタルブクロもここへ来たときは確かに青や薄紫のつややかな色をしていたのに、それがことごとく墨染めに変わっていたのだ。そう、

衣を替えて喪に服すかのように。

「青霞の仕業か」

「風流な主君には風流な臣下、ですな」

老爺が泣きそうな顔に笑みを浮かべていた。

*

目覚めたお雪はさんざん五郎丸をのしり、ひっぱたき、泣きわめいたものの半日もしないうちにけるつと機嫌を直し、下働き仲間を噂でさんざん驚かせた。お雪の機嫌が早く直ったのは、もしかすると五郎丸が青星の怪我が治るまで蛸ヶ屋敷にとどまると知ったせいかもしれない。

青星を連れて行こう、と五郎丸は考えを改めていた。青星はこんなところで困われて暮らす馬ではない。青星の俊足をもって、誰よりも速く正確に手紙を届ける飛脚になってやろうと。

「青霞や青風のような馬になりたくはないか、青星」

思えば重正は蛸ヶ屋敷へ遺書を届けた後、五郎丸が次は誰に仕えるのか指定していなかった。五郎丸以外は將軍から丁稚奉公まで一人残らず次の行き先を指定したにもかかわらず。それはもしかすると、青霞のように重正への思いに縛られず、自由にどこまでも生きていけと、そういう気持ちがかめられていたのではなからうか。

「俺は、青霞にあれほど慕われた夏山さまのようにになりたい。来い、青星。一緒に行こうじゃないか」

何よりも速いその足を頼みに生き。

そうして夏には、心を新たにすべく戻ってこよう。志を与えてくれたあの小屋へと。

【完】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9691q/>

蛍ヶ屋敷の馬幽霊

2011年11月16日13時27分発行